広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第67号　2018　231－239

「シ始メタ」と「シ始メタトコロダ」の使い分け

帖　佐　幸　樹
（2018年10月４日受理）

On the Choice of *-shihajimeta* and *-shihajimetatokoroda*

Hideki Chosa

Abstract: This study focused on two forms expressing the "beginning" of the situation, *-shihajimeta* and *-shihajimetatokoroda*, and considered their differences. In previous research, *-shihajimeru* is considered to express the so-called "starting phase" of the situation, although the actual use of *-shihajimeta* and *-shihajimetatokoroda* shows that *-shihajimetatokoroda* expresses the "starting phase" of the situation. I argue that *-shihajimeta* expresses "transition to this situation" as an event. In addition, the sentence type differs between *-shihajimeta* and *-shihajimetatokoroda*. Thus, the difference in sentence type could be related to the type of adverbs that co-occur in each form and the different functions the forms play in discourse.

Key words: *-shihajimeta*, *-shihajimetatokoroda*, "beginning" of the situation, synonymous expression, type of sentence
キーワード：「シ始メタ」，「シ始メタトコロダ」，事態の開始，類義表現，文のタイプ

１．はじめに

次の誤用例は実際に筆者が耳にしたものである[1]。

（１）［留学生との食事会に遅れて到着したら］
留学生：＃食べ始めました。
→（食べ始めたところです。）
（マレーシア人　男性　来日１年　日本語学習歴３年）

（２）［留学生が桜の木を指さしながら］
（桜が咲き始めであることを伝えるために）
留学生：先生，＃桜が咲き始めたところです。
→（桜が咲き始めました。）
（マレーシア人　男性　来日２年　日本語学習歴４年）

誤用例（１）と（２）は，私たちに次のような事実を教えてくれる。

①日本語において「開始」という事態の捉え方には２通りの捉え方が存在する。
②母語話者は状況に応じ，「開始」という事態に対して２通りの事態の捉え方を使い分けている。

ここで，「シ始メタ[2]」と「シ始メタトコロダ」は事態の「開始」について言及している点で類義表現の関係になっていると言える。では，母語話者はどのような場合に「シ始メタ」を使用し，また，どのような場合に「シ始メタトコロダ」を使用しているのであろうか。

２．先行研究と本稿の課題

2.1 「シ始メル」に関する先行研究

本稿の主眼は日本語における事態の「開始」の捉え方について「シ始メタ」と「シ始メタトコロダ」の２つ形式に着目して，その違いを考察することにある。

意味論の観点から「シ始メル」を扱った主な研究

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：白川博之（主任指導教員），畑佐由紀子，柳澤浩哉，仁科陽江

としては，高橋（1985），小田（1986），岩崎（1988），日本語記述文法研究会（編）（2007）が挙げられる。いずれの研究においても共通しているのは，事態の「動きの時間的推移の局面」（日本語記述文法研究会（編）2007：10）という「局面性」の概念からの説明が行われており，その中で「シ始メル」は「動きが始まる段階」（日本語記述文法研究会（編）2007：36）を捉えるとされる。

ここで，「局面性」という概念について説明を加えておく。「局面性」とは，高橋（1985），小田（1986），岩崎（1988）等の先行研究において導入された概念で，須田（2005）において「動作における過程と限界を，その相互関係において規定したもの」（須田2005：94）とされる。ここで言う「相互関係」とは，「動作の続く過程は全体としての続きの局面であり，その過程の両端の限界が，それぞれ，始まりの局面と終わりの局面」（須田2005：93-94）という記述に見られるように，ある局面は，他の局面の存在が前提となって成立していることを表した用語である。

須田（2005）では，この「局面性」という概念を批判的に検討し，「局面性」を文レベルのアスペクトの意味分析には有効な概念としながらも，「シ始メル」のような動詞が語彙的に有するアスペクト的意味[3]を分析する上では十分ではないとして，新たに「段階性」という概念を導入している（須田2005:94）。「段階性」とは「動作を時間的な長さを持つ三つの段階に分ける」概念であり，その中で「シ始メル」は「動作が生成し，発展し，消滅していく諸段階」の中の「生成段階」という一定の長さを持った段階を担うとされている（須田2005：94）。「局面性」と「段階性」の違いをまとめると，形式「シ始メル」が語彙的に持つアスペクト的意味が時間的過程を意味するかという点で異なっているが，両概念共に，他の段階との相互関係によって規定されている点では「局面性」と共通している。

しかしながら，上記のように，事態の「開始」を他の段階との相互関係の中で考えることは大きな問題を抱えることになる。

もし，「動きが始まる段階」のように他の段階との相互関係の中で「開始段階」を「シ始メル」が意味すると考えるとするならば，次のような表現が理屈の上では可能なはずだが，事実はそうなっていない。

（3）　A：週末提出のレポート，どうなってる？
　　B：a. # それが，<u>書き始めたんです</u>。
　　b.　それが，<u>書き始めたところなんです</u>。

（3）の事実が示すように，実際に先行研究における相互関係として事態の「開始段階」を捉えているのは「シ始メル」ではなく，むしろ「シ始メタトコロダ」である可能性がある。この点において先行研究における「シ始メル」に関する記述には問題が残る。もっと言えば「シ始メル」という形式は「局面性」や「段階性」のようなアスペクト的な概念を担う形式なのかといった問題にも発展してくる。

以上，意味論的な観点からの先行研究の記述では「シ始メル」と「シ始メタトコロダ」の意味の異なりを把握することができず，課題として，まず「シ始メル」の意味について再考する必要があることが分かる。

なお，日本語の文法指導書に目を向けると，「シ始メル」は「動作や出来事の開始を表す」と説明されている（庵他2000，庵他2001，庵・清水2003）。この説明自体は確かにそうであるが，事態の「開始」を述べるという点では，「シ始メタ」と「シ始メタトコロダ」も同じである。冒頭の学習者の誤用例（1）と（2）が教えてくれるのは，どういった時に「シ始メタ」は「トコロダ」と共起し，どういった時には「トコロダ」と共起しないのかという情報が必要だということではないか。

2.2 「トコロダ」に関する先行研究

次に形式「トコロダ」に関する先行研究を見る。

日本語記述文法研究会（編）（2007）では，「トコロダ」は，「基本的にある場面であるということを取り上げる形式」とされ，「タトコロダ」は「動きの直後の場面」を捉えるとされている（日本語記述文法研究会（編）2007：54）。

（4）　僕は今，ラーメンを<u>食べたところだ</u>。
　　（日本語記述文法研究会（編）2007：54）

この記述を「シ始メタトコロダ」に適用すると，当該事態が開始し，その直後の場面を捉えることになるため，結果的に事態の開始局面を捉えるという説明はできる。しかしながら，先行研究が述べるように「シ始メル」が相互関係としての事態の「開始段階」を意味するならば，「トコロダ」を用いて事態の「開始段階」をさらに「段階」として捉えることは「意味余剰」となり，理屈の上では非文となるはずであるが，（3）が示すように言語事実ではそうなっていない。

また仮に「シ始メタトコロダ」が「開始段階」を捉えるとしても，現状の記述では，依然として「シ始メタ」と「シ始メタトコロダ」が形式は異なれど意味的に等価であるという矛盾が解消されず，（3）や次の（5）のような違いがなぜ生じるのかといった違いを説明することはできない。

（5）［桜の開花を心待ちにしていたAが同僚に］
A：桜が咲き｛始めましたね／?? 始めたところですね｝。

以上，先行研究における「トコロダ」の意味記述から迫っても，「シ始メル」と「シ始メタトコロダ」の意味の違いを説明することは難しいと言える。

一方，「シ始メタ」と「シ始メタトコロダ」の違いについて，文のタイプの異なりという観点から迫った記述が確認される。

須田（2005）では，「トコロダ」が「完成相（ル形・タ形）や継続相（テイル形）と，一つの個別的なアスペクト的な意味において部分的に重なりながらも，テクストにおける記述の文か説明の文かという文のタイプが異なっている」（須田2005：93，（）内は筆者加筆）とし，「トコロダ」によって有標的に示される場合とそうでない場合の違いについて論じている。

この記述に従うならば，「シ始メタ」と「シ始メタトコロダ」では，同じ事態の「開始」を捉えながらも，記述として事態の「開始」を述べるのか，説明として事態の「開始」を述べているのかが異なっているということになる。日本語記述文法研究会（編）（2007）においても，「トコロダ」を記述する際に「場面」という，事態を描写的に捉える用語を用いて記述しているのも文のタイプの異なりという事情の関与が考えられる。

加えて，庵他（2001），庵・清水（2003）では，「トコロダ」を用いる際には，何等かの先行する状況が必要になることを指摘しており，先述した「トコロダ」が「説明の文」として用いられることに関連するものと考えられるが，その詳細については追求する必要がある。

（6）×博君は公園で遊んでいるところです。
cf.（6’）博君は公園で遊んでいます。
（庵他2001：97）

（7）？（電話で）今，何をしているところ？
cf.（7’）（電話で）今，何してる？
（庵他2001：97）

以上から，「シ始メタ」と「シ始メタトコロダ」の使い分けを考える際には，その文のタイプの違いを考慮する必要が示唆される[4]。

2.3 先行研究のまとめと本稿の課題

以上，先行研究を概観したが，先行研究における「シ始メル」の記述は大きな問題を抱えているということが分かった。より具体的には，先行研究で述べられた「開始段階」という他の局面との相互関係の中における事態の「開始」という意味を「シ始メル」という形式が担っているという記述は言語事実との間に大きな隔たりがある。加えて，言語事実に即して考えるならば，いわゆる事態の「開始段階」を捉えているのは「シ始メタトコロダ」であることが示唆される。

また，「トコロダ」の先行研究を概観することで，「シ始メタ」と「シ始メタトコロダ」の使い分けを考える際には，その文のタイプの異なりを考慮する必要性があることが示唆されている。しかしながら，その文のタイプの異なりが，二つの事態の「開始」を捉える形式の使い分けにどのように関与するのかは不明である。

以上を踏まえ，本稿ではまず，「シ始メル」の意味・機能について再考を行う。先行研究の概観から，「シ始メタトコロダ」が事態の「開始段階」を捉えているとするならば，「シ始メタ」はそれとは異なる意味・機能を有していることが予想される。

次に，上記の問題を解決した上で，「シ始メタ」と「シ始メタトコロダ」それぞれの使用される場面について考察を行う。「シ始メル」と「シ始メタトコロダ」は確かに事態の「開始」を述べている点では類義表現であるが，その文のタイプの異なりによって，事態の「開始」の述べ方が異なっていることが予想される。本稿ではその違いが使用場面の違いにも反映されるとの見込みを持って考察を進める。

3.「シ始メル」の意味再考

この節では，先行研究の概観から，その意味・機能について再考する必要があるとした「シ始メル」について考察を行う。結論から言えば，「シ始メル」における「開始」とは，「当該事態への移行」を一つの出来事として捉えるものであり，先行研究で指摘されるような他の段階との相互関係や語彙的意味として時間的な過程を有するものではないことを述べる。

3.1 「シ始メル」と語彙的アスペクト

先行研究において「シ始メル」がアスペクト形式としての地位を占めるとされる所以は，次の用例（8）～（10）が示すように，その後の事態の進展をほのめかすという事実からである。

（8）良人は箪笥の小ひき出しを探しはじめた。
（岩崎1988：86）

（9）そして，冷えた飯を勢いよく食べ始めた。
（岩崎1988：86）

(10)　吐き出し終わると，胸に深い空洞感がひろがりはじめた。

（岩崎1988：93）

例えば，（８）では「箪笥の引き出しを探す」という事態」の「開始」を述べているが，それだけではなく，動作主である良人はこの後も「箪笥の引き出しを探す」という動作を続けることがほのめかされる。また，（９）についても，「ご飯を食べる」という事態の「開始」を捉えているが，同時に，この事態がこの後も続くことがほのめかされる。

先行研究においては，「シ始メル」が今後の事態の進展をほのめかすことには，「シ始メル」が語彙的意味として有するアスペクト的な意味が関与していると指摘されている。

具体的には，「局面性」において，「シ始メル」が今後の進展をほのめかすことは，「シ始メル」が意味的に事態の続きの局面を捉えることから説明がなされてきた。また，須田（2005）における「段階性」からは「シ始メル」が語彙的な意味として「一定の長さを持った段階」を表すことから説明されることになる。

加えて，「段階性」においては，ほのめかしが生じることをより有効に説明するために「全体性の回復」という概念が提案されている。「全体性の回復」とは，「他の段階との関係において，始まりや終わりと規定されるのであれば，それらの段階の取り出しは，他の段階の存在をほのめかすことになる」（須田2005：183）とされるものであり，この概念によれば，「シ始メル」におけるほのめかしは，「シ始メル」によって当該事態の「開始」が取り立てられると，それに付随する形で発展・収束の段階が喚起されることによって生じるということになる。

以上，「シ始メル」がアスペクト形式として特別な地位を占めるとされてきた背景には，今後の事態の進展をほのめかすという事実があり，その説明に，「シ始メル」が語彙的にアスペクト的意味を有するからだという説明が与えられてきたことを述べた。

しかしながら，先行研究の記述にはいくつかの問題がある。

一つは，「シ始メル」が「今後の進展」をほのめかすことを説明する際に，「完了」用法の「タ」の意味が考慮されていないということである。先行研究が指摘するように，「シ始メル」が語彙的な意味として，事態の開始後の時間的な過程を意味するならば，この問題は「タ」の意味に左右されないはずだが，実際は，次の（11）～（13）が示すように無標の「ル」形の場合には，今後の事態の進展のほのめかしが必ずしも生じない。

(11)　相談に訪れるのは，毎年150人近い。約１時間半の面接を３回程度して，本格的に仕事を探し始める。　（朝日新聞2002年11月30日記事）

(12)　北京の昔ながらの作り方だと，３週間ほど漬けてから食べ始める。

（朝日新聞2017年８月25日記事）

(13)　大阪管区気象台によると，30日は前線が北上し，昼過ぎから再び雲が広がり始める。

（朝日新聞2003年６月30日記事）

用例（11）～（13）が示していることは，未来に当該事態が「開始」するということである[5]。つまり「局面性」の記述のように，「事態の続きの局面」を捉えているわけではなく，また，「段階性」の記述が指摘するように，事態の「開始」後の過程を捉えているわけでもない。このことから，「シ始メル」におけるほのめかしの問題には，「完了」用法の「タ」の意味が関与していることが指摘でき，「シ始メル」の語彙的意味の問題だけでは説明できないことが窺える。

3.2 「シ始メル」の基本的意味

先行研究における「シ始メル」の記述の決定的な問題点は次の用例によって示される。

(14)　A：週末提出のレポート，どうなってる？
　　B：a. ??まだ書き始めたんです。
　　b.　まだ書き始めていないんです。

（14）のポイントは，「未完了」を表す副詞「マダ」が表れているところにある。

さて，（14a）が示すように，ここで「シ始メタ」が意味的に不自然であることには，3.1節で述べた「シ始メタ」の意味に加え「完了」用法の「タ」の意味が関わってくる。

どういうことかというと，今後の事態の進展のほのめかしが「シ始メル」と「タ」の意味の複合的な結果として生じるとするならば，「シ始メル」は，先行研究で指摘されるような「事態の続きの局面」や「事態の生成段階」をその意味としては有しておらず，あくまで当該事態の「開始限界」を超えることを表しているのではないかということである。つまり，「シ始メタ」における「開始」とは，「当該事態への移行が完了した」という意味での「開始」であると捉えなおすことができる。このように考えれば，（14a）では，「レポートを書く」という事態への移行は「完了」しているため，その点と未完了を表す副詞「マダ」との論理的不

整合が生じ，不自然になっていると，ほのめかしの問題を考えずとも無理なく説明が与えられるのである。

加えて，(14b) のように，命題内容を否定する形式「ナイ」を伴うと，ここでは「レポートを書く」という事態に移行する前の段階が捉えられており，この事実からも，「シ始メル」がある事態から別の事態への「移行」という部分のみを出来事（変化）として切り取って述べてる形式であることが窺える。

以上，(14) では，「シ始メタ」を用いることができないことに着目し，「シ始メル」についての記述を行った。その結果，「シ始メル」の捉える事態の「開始」とは，ある事態から当該事態への「移行」を一つの出来事（変化）として捉え，「当該事態への移行」という意味での「開始」であることが分かった[6]。

ここまでの記述を踏まえると，「シ始メル」が意味的に当該事態に「移行」したこと，すなわち事態の「開始限界」のみを捉えるとすれば，「シ始メル」は「局面性」や「段階性」のような先行研究で述べられた概念が考える「時間的な過程」というアスペクト的な意味を語彙的には含んでいないということになる。もっといえば，「シ始メル」において重要なことは，過程を有する事態の「開始限界」を捉えるという点であって，「時間的な過程」を語彙的なアスペクト的意味として有するという点ではないと言える。

4.「シ始メタ」と「シ始メタトコロダ」

ここまでは，「シ始メル」を中心に記述を行い，「シ始メル」がいわゆる「開始段階」を捉える形式ではないことを主張した。ここからは，事態の「開始」を捉えるもう一つ形式である「シ始メタトコロダ」との関わりから検討を加える。

4.1　事態の「開始段階」と「シ始メタトコロダ」

さて，「シ始メル」が語彙的に「時間的な過程」というアスペクト的な意味を表さないとすると，日本語においては，事態の「開始段階」を捉えたい場合はどのように表現しているのであろうか。結論から言えば，事態の「開始段階」を捉えたい場合は，「シ始メタトコロダ」が使用される。事実 (15) ～ (17) においては，「シ始メタトコロダ」によっていわゆる事態の「開始段階」が捉えられている。

(15)　全国の先例地域などを参考にしながら，手探りで独自の道を歩み始めたところだ。（BCCWJ）

(16)　画面のデッサンを作る色の段階が終わり，モチーフ本来の色である，葉を書き始めたところです。（BCCWJ）

(17)　ベランダ側の曇りガラスの窓を開けたら大粒の雨が降り始めたところでした。（BCCWJ）

ここで，3節にて考察した「シ始メル」の意味と「タトコロダ」が「事態の直後の場面」を捉えることを踏まえると，「シ始メタトコロダ」は「当該事態への移行直後の場面」を捉えるとの説明を与えることができる。このように考えれば，「シ始メタ」は事態の「開始限界」を捉えているのに対し，「シ始メタトコロダ」は事態の「開始限界を超えた直後の場面」を捉えていると，二つの形式の意味の違いを明確に示すことが可能となる。

加えて，「シ始メタ」と「シ始メタトコロダ」の使い分けを考える上で，興味深い事実は，「シ始メタトコロダ」においては，副詞「マダ」との共起が可能になるということである。

(18)　A：週末提出のレポート，どうなってる？
　　B：a. ??まだ書き始めたんです。
　　b.　まだ書き始めたところなんです。

この点について，先行研究で記述された「場面」という，「トコロダ」によってマークされることで事態がどう把握されるかということが関わると考えられる。

この事態の把握のされ方について，寺村(1978)では，「トコロダ」によってマークされる事態は「全体の中の一部」（寺村1978：330）として捉えられると述べられており，この記述を踏まえると，「当該事態への移行」という出来事は，「全体」との相互関係の中で把握されるということになる。このようにして，「シ始メタトコロダ」は，結果として事態の「開始段階」を捉えることが可能になっていると言える[7]。

つまり，日本語においては，「局面性」や「段階性」の概念の中で指摘されてきた，語彙的なアスペクト的意味をもって「開始段階」を捉えているのではなく，「トコロダ」の機能を生かした複合的な手段でその結果として「開始段階」を捉えていることが窺える。

4.2　２つの「開始」を捉える形式と文のタイプ

しかしながら，「シ始メタトコロダ」の意味・用法を考えるだけでは，冒頭で提示した学習者の誤用を説明できない。

(19)　［留学生が桜の木を指さしながら］
　　（桜が咲き始めであることを伝えるために）
　　留学生：先生，#桜が咲き始めたところです。
　　→（桜が咲き始めました。）

（（２）再掲）

用例（19）が誤用になることについては，先行研究で指摘された，「テクストにおける記述の文か説明の文かという文のタイプが異なっている」（須田2005：93）ということが関わっていると考えられる。

より具体的には，「シ始メタ」は当該事態への移行が完了したことを単に事実として述べ立てることになるのに対し，「シ始メタトコロダ」では，当該事態へ移行が完了したことを「説明」，すなわち，「場面の状況を示し，他の出来事の原因を説明する」（須田2005：93）という点で，同じ「開始」という事態を捉えながらも，述べ方が異なっているということになる。

このことを用例（19）にあてはめると，(19）で「シ始メタトコロダ」が使用できないのは，なんらかの問に対する説明になっていないため，不自然になっているのだと考えられる。その証拠として，次のような場合であれば「シ始メタトコロダ」の使用は自然である。

(20)　A：３月なら九州はずいぶん暖かいのでは。
　　B：ええ，福岡は桜が咲き始めたところですよ。

ここから，「シ始メタトコロダ」が使用されるには，先行研究が指摘するように「説明」を与えるための先行する状況が必要になることが分かる。

なお，先行する状況が設定されていることが重要である根拠は以下の用例からも導かれる。

(21)　a. ねぇ，あいつら乾杯の前に飲み始めたけど。
　　b. # ねぇ，あいつら乾杯の前に飲み始めたところだけど。

(22)　A：最近髪サラサラだね，何か変えたの？
　　B：a. 実はね，噂のコンディショナーを使い始めたんだ。
　　b. # 実はね，噂のコンディショナーを使い始めたところなんだ。

(21)，(22）においても「トコロダ」の使用は不適格である。その理由としては，(21）は状況を報告する場面であるが，相手からの問いのような先行する状況が設定されていないことに起因している。また，(22）が示すように，先行する状況があればよいというわけではなく，間接的にせよ，事態の進捗を尋ねるような先行する状況が設定されないと「シ始メタトコロダ」は使用できないことが窺える。

4.3　文のタイプと副詞との関わり

4.2節において，「シ始メル」と「シ始メタトコロダ」では文のタイプが異なっていることを述べ，文のタイプの異なりが各々の形式が使用される場面にも関わってくることを述べた。

ここでは，「シ始メタ」と「シ始メタトコロダ」と副詞との関わりについて観察していく。

(23)　A：ちょっと，飲みすぎじゃない。顔真っ赤だよ。
　　B：a. ?? え～，まだ飲み始めたよ，大丈夫だよ。
　　b.　え～，まだ飲み始めたところだよ，大丈夫だよ。

(23）は，副詞「マダ」が要因となって意味的な問題で「シ始メタ」が使用できない場面である。この場合，事態の「開始」を述べるには「シ始メタトコロダ」を使用しなければならない。

4.2節において「シ始メタトコロダ」は「問いに対する説明」という構造を持つと述べたが，この記述を踏まえて（23）において，「シ始メタトコロダ」が果たす談話上の機能について考えてみたい。

具体的に，(23）では，話者 A は B の顔が真っ赤なことから推測して「B はずいぶんお酒を飲んでいる」との判断のもとで発話している。それを承けて話者 B は「まだ飲み始めたところだ」という発話により「（酒を）飲む」という事態への移行直後であることを述べることで話者 A の持つ認識に対する修正を行っている。ここでは，「問いに対する説明」という構造を下敷きとして，結果として「反論」の機能を果たしているといえる。

次に，「マダ」以外の副詞についても見ていく。

ここで問題となるのは，記述の文である「シ始メタ」は必ず「トコロダ」と共起しなければならないのかということである。冒頭の学習者の誤用もこの点に端を発していると考えられる。

(24)　［留学生との食事会に遅れて到着したら］
　　留学生：# 食べ始めました。
　　→（食べ始めたところです。）

（（１）再掲）

上記の学習者の誤用が示すことは，「シ始メタ」という形式だけでは，「説明」という談話上における機能を果たせないということである。この場合，例えば，「トコロダ」と共起させるという方略が考えられるが，それ以外にも方略がないのであろうか。

実のところ，(25c）が示すように，副詞「今」や「チョ

ウド」などの助けがあれば「トコロダ」の共起がなくても，記述の文で説明の文と同様の談話上の機能を果たすことができる。

(25)　A：週末提出のレポートどうなってる？
　　B：a. # それが，書き始めたんです。
　　b.　それが，書き始めたところなんです。
　　c.　それが，{今／ちょうど} 書き始めたんです。
　　d.　それが，{今／ちょうど} 書き始めたところなんです。

なお，(25c) と (25d) を対照させると，(25c) では記述の文ではあるが，発話時に当該事態への移行が完了したことを述べることで，結果として，話者 A に対して「説明」の機能を果たしている。それに対して，(25d) では，「問いに対する説明」の文ということを下敷きとし，進捗状況の「説明」という談話上の機能を果たしているということになる。つまり，(25c) と (25d) は結果として同様の談話機能を果たしていることになるが，同様の談話上の機能を果たすに至るまでのプロセスは異なっていると言える。

最後に，「マダ」と意味的に対を成す副詞である，副詞「モウ」と共起した場合のふるまいについても触れておく。結論から言えば，副詞「モウ」と共起す場合には「シ始メタ」及び，「シ始メタトコロダ」ともに共起可能である。

(26)　A：そっちの桜はまだ咲いていないよね。
　　B：a. いや，もう咲き始めたよ。
　　b. いや，もう咲き始めたところだよ。

(26a) の場合，先ほどの「今」や「チョウド」の場合と同じく，事実として述べることによって，結果的に談話上の「説明」という機能を果たすことになっている。それに対して，(26b) の場合においては，「問い」に対する「説明」という構造を下敷きにすることによって，「話者 B の住んでいるところの桜はまだ咲いていない」という認識を持つ話者 A に対して，「もう咲き始めたところだ」と述べることによって，相手の「問い」に対する「説明」という談話上の機能を超えて，(26) では先の (23) と同じく，「反論」の機能を果たしている。

なお，ここまで「シ始メタトコロダ」について「反論」という談話上の機能ばかり言及してきたが，「シ始メタトコロダ」には次のような相手の認識に対して「同意」を行うような場合にも使用される。

(27)　A：そっちの桜はまだ五分咲きにもなっていないだろう。
　　B：a. ええ，ようやく咲き始めましたよ。
　　b. ええ，ようやく咲き始めたところですよ。

「シ始メタトコロダ」によって果たされる「反論」や「同意」といった談話上の機能は一見すると相反するものであり，個別の事例だけを眺めていると説明は難しいように思われる。しかしながら，「シ始メタトコロダ」が文のタイプとして，「問い」に対する「説明」を与える文であるということを踏まえれば，相手の「問い」に対して，どういった類の「説明」であるのかという点で談話上の機能が変わってくると考えれば，「シ始メタトコロダ」が一見して相反する談話上の機能を果たすことに対しても無理なく説明が与えられることになる。

以上，この節では，「シ始メタ」と「シ始メタトコロダ」と副詞の関わりについて述べた。ここまでの観察で実際に留意しなくてはならないのは，意味的な論理不整合が生じる，副詞「マダ」と共起する場合であり，その点を除けば「シ始メタ」は「今」や「モウ」などの副詞の助けを借りることによって，「シ始メタトコロダ」と同等の談話上の機能を果たすことができることが分かった。

加えて，「シ始メタトコロダ」についても，談話上，「説明」「反論」「同意」など，多様な機能を果たすことについても，「問いに対する説明」ということを下敷きにすることによって実現させていると言える。

5．本稿のまとめ

本稿では，事態の開始の取り上げ方には２通りの捉え方があることを述べ，「シ始メル」と「シ始メタトコロダ」に焦点を当てて，２つの形式の異なりを論じた。

本稿で明らかになったことを以下にまとめる。

①「シ始メタ」は事態の「開始」を「別の事態から当該事態への移行が完了した」と捉えるのに対し，「シ始メタトコロダ」は，「当該事態への移行の直後の場面」を捉え，「タトコロダ」の機能とも相まって結果として「開始段階」を捉えることになる。

②「シ始メタ」と「シ始メタトコロダ」では文のタイプが異なっており，「シ始メタトコロダ」においては，問いに対する説明の文ということを下敷きとして，談話上，多様な機能を果たすことが可能となっている。

③記述の文である「シ始メタ」であっても，「今」や「チョウド」，「モウ」などの副詞と共起させることで，結果として「シ始メタトコロダ」と同様の談話上の機能を果たすことができる。

「シ始メル」と「シ始メタトコロダ」が事態の「開始」を捉えるというのは確かなのではあるが，「シ始メル」と「シ始メタトコロダ」を使い分けるには，各々の形式によって事態の「開始」がどう捉えられているのかという視点が大事になってくると言える。本稿ではその一端を明らかにできたのではないだろうか。

今後の課題としては，本稿において抽出した「シ始メル」と「シ始メタトコロダ」の意味と使用場面とがどのように関わるのか，より広い場面を範囲に入れながら考察を行っていきたい。

【注】

1　用例は断りのない限り，筆者による作例である。また，?? は意味的に不自然であること，# は文法的には正しいがこの場面では不適切であることを表す。

2　本稿では「シ始メル」の意味が問題になる場合は「シ始メル」を，実際の用例を考察する場合など，「シ始メル」の意味に加え，「完了」の「タ」の意味が関わる場合には「シ始メタ」を用いる。

3　アスペクト論においては「語彙的アスペクト」または「アクチオンスアルト」と呼ばれるものである。「シ始メル」は「起動相」と呼ばれる「アクチオンスアルト」からの分析が盛んである（cf. 須田2005:182-187）。

4　先行する状況に関して，佐藤（2006）では文末名詞文と「主題 - 解説」型の情報構造の関わりの観点から，文末名詞文は，情報構造上「解説」にあたる部分しかもたないため，前文脈に「主題」にあたる部分を求める文脈依存的なものがあることを指摘している（佐藤2006：144）。

5　反論として，「ル」形の場合でも，今後の事態の進展をほのめかすのではという意見が予想される。

・とある老人ホームに入居するゼブは，ある朝，妻がいないことに気付き，ホームの中を探し始める。　（朝日新聞2017年２月２日記事）

もちろん，「ル」形の場合でも今後の事態の進展をほのめかすことはあるだろうが，それは物語の粗筋の紹介や，シナリオのト書きという脱テンスのコンテクストの中で実現するものであって，「ル」形では限定されたコンテクストでしか今後の進展がほのめかされないということが重要である。

6　なお，本稿の立場から，今後の事態の進展のほのめかしの問題について述べておくと，「シ始メル」があくまで事態の「開始限界」を超えるかどうかを意味するものであるならば，この問題は，先行研究が指摘するような動詞が語彙的な意味として有するアスペクト的な意味として発現する意味的な問題ではなく，過程を有する事態の「開始限界」を超えたことから推論される語用論的な問題として処理されることになる。

7　紙面の都合で詳しくは議論できないが，副詞「マダ」と「トコロダ」が共起可能なことには，統語上「マダ」が「シ始メル」に係らず，「トコロダ」に係っていることが関わっていると考えられる。

【参考文献】

庵功雄，高梨信乃，中西久実子，山田敏弘（2000）『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク.

庵功雄，高梨信乃，中西久実子，山田敏弘（2001）『中上級を教える人のための日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク .

庵功雄・清水佳子（2003）『日本語文法演習　時間を表す表現―テンス･アスペクト―改訂版』スリーエーネットワーク .

岩崎修（1988）「局面動詞の性格―局面動詞の役割分担―」『武蔵大学人文学会雑誌』**20**(1)，pp.81-104, 武蔵大学 .

小田由美（1986）「局面動詞「～しはじめる」について」『横浜国大国語研究』**4**，pp.13-23, 横浜国立大学 .

グループ・ジャマシィ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版.

佐藤琢三（2006）「名詞カタチの文末用法と説明の機能」『日本語文法の新地平』**3**, pp.137-153, くろしお出版.

須田義治（1996）「動作の始まりを表す「しだす」と「し始める」との違いについて―類義語の理論的な考察の試み―」『日本語学科年報』**17**，pp.21-35, 東京外国語大学 .

須田義治（2010）『現代日本語のアスペクト論』ひつじ書房 .

高橋太郎（1985）『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』国立国語研究所，秀英出版 .

寺村秀夫（1978）「「トコロ」の意味と機能」『語文』**34**，pp.10-19，大阪大学.

中俣尚己（2012）「「ている」と「ているところだ」」日本語教育国際研究大会2012パネルセッション「実

質語との共起に着目するコーパスを用いた文法研究―明日から教室で使える情報を取り出す方法―」発表資料.
中俣尚己（2014）『日本語教育のための文法コロケーションハンドブック』くろしお出版.
日本語記述文法研究会（編）（2007）『現代日本語文法3第5部アスペクト』くろしお出版.
森田良行・松木正恵（1989）『日本語表現文型』アルク.